『比較民俗研究』17. 2000／3

研究ノート

韓国済州島における蛇神信仰考
－環東シナ海文化領域における比較の視点から－

玄　珍瑚※

《目次》

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．環東シナ海文化領域と済州島
Ⅲ．済州島民における蛇観念
Ⅳ．済州島の蛇神信仰形態
Ⅴ．韓国本土の蛇神信仰との比較
Ⅵ．周辺民族の蛇信仰との比較
　1）中国の蛇神信仰
　2）日本の蛇神信仰
　3）台湾と沖縄の蛇神信仰
Ⅶ．結び
引用文献
写真

Ⅰ．はじめに

周知のごとく，中国の揚子江の流域以南，韓国半島南部，さらには台湾から琉球列島を経て，日本にいたるところを地域概念として「環東シナ海」と呼ばれている。最近，日本では環東シナ文化が重視され，「環東シナ海地域」に共通する文化的伝統を巡って基層文化に関する研究が活発に行われている。この地域に共通する文化的伝統を長江下流流域から中国東南部沿岸地域に成立した水稲作農耕と漁撈に基礎を置く「越文化」[1]として把握するのが一般的な見解である。この，「環東シナ海地域」の中には，古くから「耽羅（タンナ）国」と呼ばれて一国を形成した韓国では一番大きな島である済州島がある。『日本書記』にしばしば交渉があったことが見えている。地理的には済州島は韓国半島の南西に浮かぶ孤島で，面積一，八六〇平方キロ，大略大阪府の面積に近い。形は馬鈴薯のようにまるっこい。済州島には，今なお巫俗儀礼において，神房（シンバン：シャーマンのことを指す済州島の言葉）によって，ボンプリ（本解）という神の縁起談（神話）が多く歌われており，村ごとにいろいろな口承文芸が豊富に伝承されている。済州島は村を単位とした生産と信仰の共同体社会である。この共同体地域社会で信仰は男性を中心とした儒教式祭祀と，女性を中心とした巫俗儀礼として大きく分けて行われている。巫俗に基礎をおく済州島の民間信仰には現在も雑多な形で崇める蛇信仰が行われている。蛇に関する信仰は龍神と関連して，世界の古代信仰遺跡で，確かに探すことができる信仰形態に中で一つである。古今東西に限らず農耕社会には等しく分布されていたものとして知られている。ここでは対象領域として環東シナ地域の中に位置づけて韓国の済州島に見られる蛇神を取り上げ，周辺民族との比較を行い，それによって，そこに見られる蛇神の要素との共通性，および独自性を抽出しようと試みる次第である。

Ⅱ．環東シナ海文化領域と済州島

地域文化の形成における文化の伝播と相互接触変化を考慮しない孤立した文化形態とは期待できないわけである。最近，日本では日本文化の原郷が雲南の山地の焼畑文化にあるとする考え方は根強い。さらに同じ照葉樹林帯に連なり，雲南のを受け継ぐのが江南の「山越」による山地焼畑文化であるといわれている。山地焼畑文化と特定しないまでも，日本の水稲耕作文化の原郷として「越」を考える

※筑波大学大学院地域研究研究科研究生

研究者は多い[2]。日本の初期農耕文化を越系と考える研究者は弥生稲作以前に,「山越」と考えられるヤオ族の山地焼畑耕作文化（イモと雑穀）が日本に伝播，つづて越系の稲作が越系の海洋民によって環東シナ海をよぎって，直接北九州へ，または台湾から沖縄列島を北上して本土へ，あるいは朝鮮半島南部（済州島）を経て北九州へ伝播したとする[3]。この視点から見ると，中国大陸東南沿岸と日本列島の海人文化を結びついている中間項として済州島は重要な地域である。これから済州島の古代基層文化形成背景を論ずるとき,「越」文化を想定しなければならないと思う。三世紀前後の日本の様子を記した魏志倭人伝が含まれる中国の「魏志」韓伝には「州胡があり。馬韓西の海中の大島上にあり・・・みな髪頭することと鮮卑の如し。・・・その衣は上あるも下なく，ほぼ裸勢の如し。船に乗りて往来し，韓中と市買す。」という古代済州島に関する記録が見える。これは州胡人が生業上活動を便利するために現われた潜水魚捞民の習俗である。古代耽羅の文化が海洋民族であった越の海人文化と歴史，文化的に系統を同じくするとして把握することができる。古代耽羅と日本との交流のなかで，耽羅は特産物として鰒と同じような海産物を輸出されている記録が見える。また平城京出土の木簡にもその記録がでている。この鰒を採集した人は言うまでもなく，耽羅（済州島）の海民たちである。現在も海に潜ってアワビやサザエを取る海女（潜女）伝統を残している。古代環東シナ海沿岸地域一帯に海上交通に使われた筏船という船は済州島で数は減ったものの，現在もイカダブネによる海藻採取漁が行われている。環東シナ文化領域のなかでは古代越民族（海洋人）が龍船を乗って水紙に祭祀を捧げたから始まった儀礼としての船競漕の民俗が見える。この文化の淵源は中国の長江中流域の洞庭湖を中心とする地域にあったと考えられている。この地域は荊楚地方と呼ばれ，唐代には龍舟競渡（中国では船競漕を競渡という）のもっとも盛んな地域であった[4]。荊楚地方から海洋民文化の色の濃い呉越地方に伝わり，これが日本の稲作伝播と関連して済州島を渡って沖縄や長崎に伝わったと思われる。済州島には豊饒や航海安全を祈願する潜水漁捞民の祭りである迎燈祭（ヨンドン・クッー豊漁祭）を行われるとき最後に神を歓送する祭祀である躍馬戯という[5]船競漕の民俗がある。沖縄ではハーリという爬龍船競漕が各地で盛大に行われる。長崎ではペーロン競漕が行われる。中国のミャオ族の龍舟競渡は豊饒祈願の農耕儀礼である祖霊祭として現在行われている。また，環東シナ海文化領域の中にはこの船競漕の民俗以外にも越系民族の宗教習俗である鳥霊・龍蛇信仰が稲作と関連して共通的に存在している。越系民族の原郷の一部であったとみられる江南の河姆渡稲遺跡からは稲穂を挟んで二匹の魚の描かれている絵画と燃える太陽を囲む二羽の霊鳥の刻画が出土している。稲作には豊かな水が必要であり，その水には豊かな魚がいる。稲作には，燃える太陽の熱が必要である。その大切な太陽は二羽の霊鳥によって護られていると信仰していたもので，この霊鳥のある限り太陽は日々に熱と光を施してくれることになると考えられていたものである[6]。古代越文化で鳥は人間界に稲種をもたらした穂落神である。環東シナ海地域には鳥と関連したいわゆる射日神話，穂落神伝承が分布している。済州島にはいまもこの射日神話が巫者（シンバン）たちによって巫俗儀礼を行われるとき巫歌として歌っている[7]。中国の少数民族である哈尼（ハニ）族には鳥と関連した宗教習俗が伝承されている。焼畑で陸稲の播種がはじまる直前の四月吉日を選び，村人の共同作業で村の入口と出口の木造りの門が建てられる。その門をロコーンという。それは二本の柱の上に笠木をのせたもので，笠木の上には木製の鳥形象物，注連縄，鬼の目を掛けられたものである。

それは村人を守護することによって，その年の穀物の豊饒がもたらされることを示すものである[8]。これと関連した類似点があることが済州島には家で神祭りをしている期間掛けられるものとして禁縄（クムチュル）があり，鳥の形象物をつけたものとして防邪塔（バンサアダプ）と呼ばれることと鳥竿（ソッテ）という宗教的習俗が見える。日本には門に鳥の形象物をおく例としては神社の「鳥居」がある。また，立竿祭祀としては対馬の「卒土」とよばれる天童地が知られる。これから，ここで論じろうとしている済州島の蛇信仰も言うまでもなく，古代越族の蛇崇拝の習俗から伝わったものとして認められる。環東シナ海文化領域の中で済州島を含めてその民俗の正体と系統を知るためには他民族，他文化の民俗との比較する必要がある[9]。済州島巫俗社会における蛇神信仰も環東シナ海文化領域のなかである韓国本土および，周辺民族の蛇神信仰と比較，考察すればもっと明らかにされると思う。

Ⅲ．済州島民における蛇観念

済州島の俗信の中で「蛇を見ながら指を指すと指が朽ちてしまう。触ると仕返しするから見えると見えないふりをして通りすぎろ。」という言葉がある。古くから済州島先祖達にとって蛇は単純な動物ではなく，よく仕えて信じれば冨をもたらし，そうしないと少しも利するところがないということを認識して来た[10]。蛇信仰の淵源を知られる一般神である七星神本解にはこのような内容が記されている。「・・・宋僉知が鋳鉄石甲を三度叩きつけると，自然にふたが開いた。集まって中を見ると，・・・八匹の蛇が横たわっていた。妊娠をした娘が蛇七匹を産んで，蛇に生まれ変わったのである。“あちゃー，むさ苦しく縁起の悪い物に出会ってしまった。”宋は釣竿であっちこっちかき回し，七人の潜水と宋は病気にかかって倒れ，死境をさまよっていた。リウォンシンは占い，“他の国から入って来た神を虐待した罪になるので，その神を招いて祭れ。”と告げたのである。七人の潜水と宋は，シンバンを呼び，大きく祭ると，身病が洗われたように良くなり，・・・財産が入ってきて，瞬く間に金持ちになっていた。その時，七星洞の宋大静婦人が，朝，水を汲みにクンサンムルに来ていた。水の入り口で横たわっている蛇を発見した。“まあ，これは一体何ということでしょう”いぶかしげに思い，エプロンを外し入り口に置き，水を汲みに入った。水を汲んで出て見ると，外しておいてエプロンのすそに，蛇が入って行って横たわっているではないか。“わたしのところに下りて来られたご先祖さまではございませんか。さあ，わたしの家においでください。”宋大静婦人は，エプロンのすそでへびを包み，庫房に待って行って，迎えた。そのときから宋大静の家は瞬の間に金持ちになっていった。ちょうど，ある官吏が通りかかった。“ええい。むさくるしいく，けがわらしい”と言って，唾をペッペッとはいた。その日以来，その官吏の口の中はただれて行き，病気にかかり，死にかかった。あまりにも心苦しいので，よく知っている巫女を呼び，占ってみると，“外国から入って来た神を見て，やりきれない言葉を吐いた罪なので，祭らなければならない”と言うのである。」[11] 済州島人々の蛇に関する認識を見ることができる。済州島人にとては蛇は触らない神聖な動物であり，殺してはいけない禁忌される存在なのである。神聖動物の中で蛇が占める比重が大きいのは蛇の神聖な不死の存在だという認識と深く関わりを持っていたのである。日本の民俗学者吉野裕子先生は人間の死生観を蛇と結びつけて「人間とは仮に人の姿となっている蛇であって，現世にあふれる蛇の一種なのである。人間は本来，蛇であるゆえに祖霊蛇の領する他界から来て，他界に帰すべきものであって，その誕生は蛇から人への変身であり，死は人から蛇への変身であ

る。」と指摘している[12]。蛇の脱皮は生命の再生の象徴であったにちがいない。蛇が再生するという内容は済州島で死霊供養祭時，神房によって口誦されている叙事巫歌である人間の差使姜林（差使本解）にも「姜林は，あの世へは目閻魔大王の使者として仕えるようになった。ある目閻魔大王から命令を授けられました。現世に行って，女子は七十，男子は八十になったら，順々にあの世へ来るように伝えよ，というのである。姜林は命令通り赤牌旨（人間を捕らえて来いという命令書）を背中にしばりつけ，この世へと向かった。道は長くそして果てしなく，何度も何度も休まなければならなかった。どれほど歩いただろうか。姜林は道端に座って足を伸ばしたまま休んでいると，鳥一羽が「カー，カー」と泣きながら飛んできた。「お父さん，その赤牌旨をわたしの翼に挟みましょう。この世に行って，告示板に貼って来てあげますよ。」それでなくとも足が痛くて仕方がないのに，自分の代わりに赤碑旨を持って行って，貼って来てくれるというので，姜林は喜んで鳥の申し出を受け入れた。姜林は赤碑旨を鳥の翼の間に挟んでやった。鳥は，さっそくこの世に向かってパタパタと飛び立って行った。しばらくして偶然下を見ると，農夫が畑で馬を屠殺していた。馬肉を一切れ貰ってから行こうかと思った鳥は木の枝にとまって，しばらく待っていたが，作業はそう簡単には終わらなかった。鳥は待ちくたびれて「かー，かー」と鳴いた。すると，屠殺作業をしていた農夫が蹄をポーンと投げ捨てた。鳥はびっくりして，飛び出した瞬間，ハッと思った。ひろげた翼から，赤碑旨が落ちてしまったのである。その時ちょうど，塀の穴に隠れていた蛇が，その赤碑旨を見つけて，呑み込んでしまったのである。だから蛇は，死ぬことがなく，九度死んでも再び生き返るようになったのである[13]。済州島の巫俗社会では蛇信仰が古く民間信仰の一形態を残し，蛇を神聖視し，崇拝されてきた源泉は蛇を再生する永遠の生命の存在であり，霊験な動物として認識されてきたからである，また，蛇は生活力と繁殖力が非常に強い動物である。済州島蛇神神話である七星本解を見ると，富をもたらしてくれる七星神は一遍に，子供七人を産んで，よく育て自立するようにたすけてくれる。済州島において蛇が霊験動物として信仰されてきたのは蛇が済州島民たちに子孫を繁栄させ，豊饒を与える存在として認めてきたからである。

Ⅳ．済州島の蛇神信仰形態

今なお，済州島には家を守る蛇があることを認め，幸福をもたらす家霊として蛇を神聖視し，先祖崇拝と結びついて蛇神信仰が伝承されている。家霊信仰として信じ，仕えているのは，一般神である七星神と一家および一族の守護神である祖上神としての蛇神信仰である。また，一つの村の一家とか村の共同体の守護神としての生業の豊饒，治病などをもたらす本卿堂信仰として女性によって巫俗儀礼として行われている。済州島各家庭で祭儀が行われる時，祭られている蛇神七星（チルソン）は自然神である北斗七星とは事なるものとされている。済州島巫俗社会では蛇神七星を別称として「七星富君」「府君神霊」，北斗七星を「七元星君」として解かるように別称を使っている。蛇神信仰意識が済州島では名前で二重になっているが，濃厚だと思われるのは蛇神七星である。この蛇神七星は全島的に祭られ，その家で行われる全ての祭儀のとき供物が供えられている。家庭信仰として祀るこの七星蛇神信仰習俗における蛇神を祀る場所が違い，家を中心にして内と外，二分して家の中で祀る蛇神を内七星（アンチンソン），外で祀る蛇神を外七星（パッチルソン）と呼ぶ。内七星は各家の穀物，食糧等が貯蔵されている庫房（コパン）という部屋で，祖先崇拝と結びついて祖先祭祀や名節の茶礼とき，その家の主婦が供物を捧げて祭っている。

外七星は屋敷の裏庭の清らかな場所を選んで，収穫した五穀の種を瓦の中に入れてその上を藁で葺くもの（チルソンヌル）を一年に一度チョルガリ（季節の変わり）という巫俗儀礼として祭っている。では，このように七星神を家庭信仰として二分して祭る信仰の本源は何であるか。済州島には神話としてこの七星神という蛇神の由来に関する本解が伝承されている。この蛇神の淵源を要約して見よう。「張国の張雪龍大監と宋国の宋雪龍婦人のひとり娘が僧侶の子を孕んで，石函にいれて流し，済州島の海岸に漂着した。宋僉知が鑄鉄石甲を三度叩きつけると，自然にふたが開いた。集まって中を見ると，・・・八匹の蛇が横たわっていた。妊娠をした娘が蛇七匹を産んで，蛇に生まれ変わったのである。“あちゃー，むさ苦しく縁起の悪い物に出会ってしまった。”宋は釣竿であっちこっちかき回し，七人の潜水と宋は病気にかかって倒れ，死境をさまよっていた。リウォンシンは占い，“他の国から入って来た神を虐待した罪になるので，その神を招いて祭れ”と告げたのである。七人の潜水と宋は，シンバンを呼び，大きく祭ると，身病が洗われたように良くなり，・・・財産が入ってきて，瞬く間に金持ちになっていった。その時，七星洞の宋大静婦人が，朝，水を汲みにクンサンムルに来ていた。水の入り口で横たわっている蛇を発見した。“まあ，これは一体何ということでしょう”いぶかしげに思い，エプロンを外し入り口に置き，水を汲みに入った。水を汲んで出て見ると，外しておいてエプロンのすそに，蛇が入って行って横たわっているではないか。“わたしのところに下りて来られたご先祖さまではございませんか。さあ，わたしの家においでください。”宋大静夫人は，エプロンのすそでへびを包み，庫房に持って行って，迎えた。そのときから宋大静の家は瞬の間に金持ちになっていった。・・・七匹の子蛇神と母親神はそれぞれ自分の司る事物を選んで，別れた。ただそのうちの二，末娘蛇神は外七星として，母親蛇神は内七星として家を守る家霊になった。」[14]これは富の神として蛇神本解である。済州島民達はこの府君七星である蛇が家を出ていってしまうとその家は貧乏になり，よく祀ればお金持ちになると信じている。蛇神信仰として祭られている七星神は家でよく祭れば健康，幸福，富をもたらしてくれる家霊神である。一方，この蛇神（七星）を虐待したり，呪詛すれば，死境をさまよう病気にかからせる疾病，災疫の神である。済州島で，もう一つの蛇神を信じているが，それは村落神として本卿堂で祀られている堂神としての蛇神である。この蛇神信仰は済州島東南部兎山という村を中心にして祀られている。この，蛇神を祀る祭日が毎八日（八，十八，二十八日）のため，その祭日によって八日堂神という。この神を部落民が共同してよく祀れば，生業の豊饒をはじめいろいろな幸運をもたらすが，さもないと疾病や災害を与えるという。この八日堂神である蛇神もほとんど全島的に分布しているが，その，主な要因はその村落の女性が嫁ぐ時には，かならずこの神がその後をついていって祀られるからである。堂神としての蛇神は済州島には娘ツキ形式で継承されていて，結婚を対象として女性は敬遠される[15]。そして，済州島海村の本卿堂で祭られている七日婆（イルエハルマン）とよばれる蛇神である七日堂神がある。本卿堂神を祭る祭儀は女性によって個別家庭儀礼と本卿神祭日に堂に集まって行われている。個別家庭儀礼は新年を迎え，神占いをしてよい日，よい時間を決め，神房を家に迎えて個別祈願をする。また，家で大きなクッ（巫俗儀礼）が行なわれる時本卿神を祭る。村の本卿堂共同祭儀には女性たちが各自の祈願のためにご飯，果物，魚など神様に供えるものを準備し，その蛇神がある本卿堂に集まって神房によって主管される。

V．韓国本土の蛇神信仰との比較

韓国本土には内七星に類するものとしては，蛇神意識がなく祖霊崇拝と結びついて仕えている「祖先壺（チョサイタンジ）」という家庭信仰のものがある。これは，農神に捧げる意味で新穀をいれておく壺として説明されるが，壺の米を祖霊を象徴するものとして思い，祭祀をすることである[16]。壺は板の間または主人夫婦の部屋の棚の上に大事に安置される。祭祀方法は済州島の同じように主夫が祭儀のとき供物が供えられて仕えている。次に済州島の外七星に相当するものとして，韓国本土には，「業（オップ）」，「基主（トジュ）」という民間信仰として祭られて来た遺習がある。「業」は済州島と同じように家の候宛のツトに祭られる富の神としての蛇神があって，家霊信仰としてそれを祭ることによって暮らしが豊かになるものと考えられている。「基主」は家の敷地を守る地神として屋敷神の壺を家の後の庭に，この壺を置いてツトをかぶせて置いてあるものである。この，「基主」信仰も韓国の地方によって，青龍壺（チョンヨンタンジ），チョルヨン，チョンヨン婆様，などいろいろな形として呼ばれている[17]。これらは祀る場所や方法において済州島の外七星と似ている。龍壺（ヨンタンジ）は家の後宛や庫房の棚などにおいて祀り，春には麦，秋には米を毎年二回ずつ入れ替えることである。龍は水と雨とに関係があって農事の豊年を祈願する意味があったという。玄容駿先生は韓国本土のいろいろな家庭信仰が蛇を龍と同一概念として見，龍蛇信仰と相通ずることとして見做した[18]。済州島で蛇と龍を同一した龍蛇信仰と結びついている例はいろいろなところで探してみることが出来る。済州島は周囲が海に囲まれているところだから海岸線近くにもっとも密集している。海村民は農業を主として，漁業を兼ねて半農半漁の生業形態を取っている。この，海村社会の普遍的な蛇神としての本卿堂神は「七日婆（イルエハルマン）」である。この，「七日婆（イルエハルマン）」神は東海龍王国の三女として龍神でり，海神である。また，海村で新年を迎えて海田の豊年を祈願する儀礼として潜水（海女）達によって捧げている潜水巫俗儀礼のなかで，龍王迎え（マジ）という祭祀がある。この神は龍神でありながら海田耕作神である。済州島巫俗社会で，蛇神儀礼として，兎山八日堂神の儀礼のなかで「鈴解き」ということがあるが，この儀礼行為は蛇神の恨を解くために，長い綿布四個を結び目をつくって，それを一つ，一つ解いて行く儀礼である。この儀礼を執行する神房（巫女）は，結び目をつくった鈴の形をした蛇を「青龍，褐龍」と呼び，夜光珠を噛んで庫房へ置き換える呪術的な儀礼が行われる[19]。これを見ると済州島の蛇神信仰は龍神信仰と同一視できる龍蛇信仰であることがわかる。しかし，この，済州島の蛇神信仰も古代に溯ると済州島に限定した特殊なものではなく，古代韓族の龍蛇信仰と王権との結びつきに由来するものである。新羅歴代王たちの伝承神話のなかで，卵生神話に結びつく王権と龍神とのつながりが顕著である[20]。新羅には朴氏王系の始祖である朴赫居世，昔氏王系の始祖である昔脱解，金氏王系の始祖である金閼智誕生神話がある。朴赫居世は紫色の大卵から生れ，辰韓の六村の人達によって王者として奉戴され，梁里の閼英井の辺に現われた一匹の鶏龍の左脇から生まれた美姫を王妃としたという。昔氏王系の始祖である昔脱解は，龍城国の王家の出であり，この国の龍王の寄胎によって大卵として生れ，不祥事として大櫃の中に沢山の七宝や奴婢とともに入れられ，舟に載せて漂流させられるが，一匹の赤龍によって護られ，鶏林の東の阿珍浦に到達したという。卵生神話に龍崇拝と結びついている。済州島の漁村にはいまも海上の安全と豊漁を祈願する迎燈祭（ヨンドン・クッー豊漁祭）が毎年陰暦2月に行われている。神話学者三品彰英先生はこの迎燈神と昔

脱解神話との関係を論じて迎燈神を龍神であり，脱解神話の特殊型として把握している[21]。朝鮮民俗学の開拓者のひとり，民俗学者，秋葉隆は済州島における海村人の龍神の信仰を，龍神およびこれを結合せる迎燈姥を以て象徴される海村的新文化として解している[22]。実際的に，済州島の海村の本卿堂信仰で海民たちが信じながら，祀っている神は海田の豊饒をもたらしてくれる「七日婆（イルエハルマン）」神である。この，「七日婆（イルエハルマン）」神は済州島の七日堂における仕えている龍神と結びついている蛇神である。迎燈神は海民たちを守る守護神である。海民たちの生活の拠り所は海，海田である。そこで守ってくれる海霊が，海神である龍である。また，家には農作の豊饒を通して家に富をもたらしてくれる家霊があるが，それが蛇である。豊饒，守護神としての龍と蛇を同一視する龍蛇信仰の観念を見ることが出来る。鈴木満男先生は済州島のヨンドン神を水稲耕作に結びつく水神＝蛇霊信仰として論じ，環東シナ海地域にみられる海上他界観と結びつくマレビトとして把握された[23]。済州島にも前に言及したように卵生神話と王権との結びついている神話が伝承されている。それは「土中からの始祖」神話である「三姓神話」である。この神話の内容の中で，東海碧浪国から来た木箱の中に「玉函あり，形は鳥の卵の如し」ということが記されているが，卵生神話の残映が認められる。この神話は済州島の社会が狩猟生活から農耕生活に移行する民族が連合して，形成された首長社会であることを反映している。鳥越憲三郎先生は狩猟民から農耕民に移行すると，生活環境も生産様式も変わるため，その社会構造の中で，主権者の権力が保障される内容をもつ神話が必要となる。神話が主権者の手でつくられるとはいっても，その神話が一般民衆に絶対的権威をもって受入れられるためには，その社会を反映した内容のものでなくてはならないからである。そのことによって，神話の絶対性・神聖性が保持できると言われている[24]。農耕社会で，首長が自分の絶対的な能力を発揮するために，必要な権威の源泉は水である。水は命と関わりがあって大切なものである。水をよく治める首長は権威を認められる。水に関する霊的な支配力を持つことを求める必要がある。そのために首長は水神とつながりがあることを示す必要がある。龍と蛇は同系の水霊である。済州島の「土中からの始祖」神話である「三姓神話」の思想的な淵源は蛇神崇拝である。言い換えれば，古代耽羅国の首長たちの支配理念であったのである[25]。

VI. 周辺民族の蛇信仰との比較

1）中国の蛇神信仰

中国では蛇は原始から神として崇められる崇拝の対象であった。大きな江の流域の人々は河神，江の神が蛇の姿で現われたと信じてきた。中国の創世神話の中の伏羲氏と女媧氏は「人首蛇身」（頭は人間で体は蛇）として表現されている。越民族の原郷の一部であったと見られる江南の河姆渡遺跡からは大量の陶器類が出土しており，それらには蛇形に他の獣形をとり入れて，驚くべき霊獣としての龍が生み出されていく過程と同様の複合の進められた方が見出され，古くから蛇信仰があったことが推定されている。龍は，蛇霊信仰を超自然的なものにまで高めていくことによって出現した霊獣である。龍の場合は蛇霊への信仰が基礎になっている。『呉越春秋』には，越人が蛇を崇拝したということについて，「其位蛇也，故南大門上有本蛇，北向首内，示越属呉地」と記載されている。照葉樹林文化のセンターと考えられる雲南地域，また稲作の起源の地と見られる長江下流地域には古代蛇トーテム崇拝の遺習を残す越系民族の蛇霊信仰が今日にもひきつづいて持続され，信奉されている[26]。長江下流地域である越系民族の民間では，蛇は霊物，神物であると同時に禍

いものでもある。蛇は二種分けられる。一は家蛇，もう一つは野蛇である。家蛇は無毒で，主な崇拝の対象とみなされている。蘇州の城内には蛇王廟があって，蛇将軍の像が祭られている。そして，蘇州では四月十二日を蛇王の誕生日として，この日に人々は廟で線香を立て，もらったお札を戸や窓に張りつけておくと，蛇の毒を避けることができる。また，福建の章州にある南台廟は俗に蛇王廟と呼ばれ，その神像は僧の姿をしている。蛇に噛まれた人がこの廟に詣でれば，その痛みは自然に止まる。胴体を断たれた蛇が道にいたり，首の切られた蛇が廟の中にいたら，それは蛇王がその罪を罰したものだと伝えられている[27]。済州島の蛇神信仰と比較して見ると，蛇神を祀る場所が違う。前に言及した通りに済州島には二つ分け，家の中穀物貯蔵場所である庫房（コパン）という内七星と家の後苑の清らかな所である外七星で蛇を祀っている。越民族は蛇神の像を作り崇め敬う。蛇を祭るためには，蛇神の像の座る所を建てる。それが蛇王廟である。越民族の民間で祭る蛇は家を守ってくれる家霊神とされており，陽宅と陰宅に分けられる。陽宅の蛇は家守りであり，陰宅の蛇は墓守りである。金華地方では済州島と同じようにどの家にも守り神がおり，蛇がそれであると考えられている。家を守護する蛇を鎮家蛇と言う。家蛇を見つけたら済州島の同じように決して殺してはならない。言葉を尽くしてお帰り願うのである。家神が現われた場合香を焚き拝む。蛇習俗の中で，済州島と違う点は蛇が墓と関連することである。墓蛇の役割は単に墓守りだけでなく，地相や方位と係わりがあり，蛇が居つく所は必ず縁起の良い場所と見做される[28]。韓国の本土で５－６世紀頃高句麗古墳壁画でこれと同じような蛇の形象が見える。ここで，蛇は地神として守護神の役割をしている。特に，宣興地方の葬俗では祖先の墓を移す際，墓の中に蛇がいると，子孫繁栄とも考えられる。これは蛇が一度に沢山の子をうむ豊饒と多産の象徴であるからである。次に，済州島と中国の蛇霊信仰と関連して考えられるのは，越民族の家蛇は倉龍，財神，祖先の化身である。済州島と同じように蛇は穀物倉庫を守る神と見做される。寧波地方では「青龍（蛇）は穀物倉庫を管理し，黄龍（蛇）は水を管理し，米を入れる缸を管理する」と言われている[29]。蛇には米をもたらす力があると信じられ，蛇がいれば缸の中の米はなくなることがなく，使えばまた増えてくるという。穀物倉庫に姿を見せた蛇は家運隆盛の象徴とされる。紹興地方の商家には商売繁栄，家内安全の守りである五聖菩薩という蛇神祭りの習俗がある。杭州地方では，屋内で蛇を見つけると，先祖が家に帰ってきた。或は財神が家にと見做し，香を焚き拝む。家蛇を祖先として見るのは原始時代のトーテムの名残である。原始人は，人とトーテムの間には一種の血縁関係が存在しており，トーテムはその民族の由って来たところであると信じている。トーテムを祖先として崇拝したとも言える[30]。済州島の巫俗社会でも同じように，蛇神を「祖先様」と呼んでいる。また，済州島の蛇神信仰と関連したもう一つの違う点は済州島では「祖先様」である蛇が祖先崇拝と結びついて，祖先の祭祀の日に女性によって祭つられるが中国の寧波地方，太倉地方では，蛇の加護を求めるために男性によって行われる最も特殊な儀式である「招蛇」という蛇神祭祀の儀式をとして蛇神が祭られていることである。これは村の人々によって蛇神廟で行われる村の共同体儀式である。この「招蛇」という蛇神祭祀の儀式は人力では逆らうことも避けることもできないような災害の時のみ，災難に対処するため行われている[31]。この，「招蛇」の祭祀を行うために村には村の吉凶を占う七人の世襲の招蛇人と呼ばれる蛇巫がいるが，済州島には特別な蛇シャーマンはいない。済州島のシャーマンはだれでも一般的な蛇に関する巫

俗儀礼を行う。この蛇を祀るために必要な存在である蛇巫は日本の蛇霊信仰の習俗にも見える。

2）日本の蛇神信仰

環東シナ文化領域に位置している民族の中で，日本は現在でも各地に蛇霊信仰が強く残っている。韓国には古代から蛇霊信仰が農耕と関連してあったが今は韓国本土にはその遺習が少し見える。済州島では今も強く伝承されている。日本は首都東京をはじめ各地域でこの蛇霊信仰が伝承されている。東京世田谷区では奥沢神社例祭に藁で大蛇が作られ「大蛇お練り」が行われている。奥沢では疫病除けと伝えているが，各地には注連縄，境の神，雨乞い，盆，綱引き，などでこの藁の蛇が登場している。藁で蛇の形を作ってその藁蛇を実際的に蛇の身体として祀る習俗は済州島の巫俗社会では見られないことである。日本の村氏神にあたる済州島の村の本卿堂には大きな樹木があって，神木として信仰されている。蛇神として祀られている神木は人格化されている。また，済州島では巫俗儀礼時には紙で蛇の形をつくったり，綿布を蛇の身体として使っている。日本の蛇霊信仰は根強い。考古学の発掘によって，その痕跡は縄文中期の土偶や土器に蛇を造形した土製品からみることができる。弥生時代からは主に水に係わって龍蛇信仰が展開した。考古学的に龍蛇を線刻した弥生式壺形土器は数多く出土しており，井戸址などから発見されることで，水や祈雨と係わっていた模様である。金関丈夫先生によれば，鹿児島県種子島の広田遺跡から出土した諸遺物には，明らかに江南系の「龍蛇」を形どった装飾品であると指摘されており，弥生期に，東シナ海を渡っていたと考えられている[32]。この装飾品の多くは貝製品であり，琉球からさらに南方にその系譜は連なるとされた。とすれば，黒潮を通して，この海域は共通の要素を持っていたのである。たとえば，宝貝の一種は，済州島からも産するのである。龍蛇信仰は中国の大陸に濃厚にあり，南方に連なる信仰である。日本の龍蛇信仰は日本の稲作伝播と関連して，中国の越系の稲作が越系の海洋民によって環東シナ海を渡って済州島を経て，日本に伝わったと考えられる。日本の民俗学者である吉野裕子先生は長野県藤内遺跡から出土した土偶に現われた蛇の造形を見られ，蛇を着る巫女を造形したと把握され，古代の日本には蛇を着る思想があったことを指摘している[33]。そして，群馬県上芝古墳から出土した埴輪にある連続三角形文様は蛇を抽象的に表現したと指摘されている。日本の古文献には様々な蛇神信仰に関わる記述が残されている。『常陸国風土記』は古代日本において蛇を飼う蛇巫の家が存在したことを語っている。次のようなことである。「茨城の里でヌカビコと，ヌカビメ兄妹が住んでいた，ヌカビメの所に毎晩，名も知れない男性がかよって来た。そして，ヌカビメは小さい蛇を生んだ。ヌカビメはこの子は神の子と思い，小さな聖なる杯に入れて小蛇を飼うことにした。蛇は急速に大きくなり，瓮に入れ替えた。しかし，それでも足らなくなり，ついには甕に入れてもはみ出しそうになった。そこでヌカビメはもうこれ以上の養育はできないから父のもとに帰るようにと蛇を諭す。すると蛇は“わかりました。しかし，一人でいくのはさみしいので，小さな子供を道連れにしたい”という。ヌカビメがこの家には私と伯父のヌカビコしかないからダメダと言うと，蛇は怒り恨んで，別れぎわに伯父のヌカビコを殺す。これを見たヌカビメは，瓮を蛇に投げつけると，子供は天に昇ることができず，山にとどまった。蛇を飼った容器は今も残っており，その子孫は社を立ててこれを祀っている。と言うのである。」[34] 済州島の巫俗社会では蛇神信仰の淵源を推される七星神本解が存在しているが日本のように済州島の民間で蛇が飼われていたとする伝承は見え

ない。日本の古代から伝承された蛇を神聖視し，蛇を屋内で飼う習俗の事例は現在でも日本の中国，四国地方を中心として，蛇神の飼育習俗が残され，見られる。氏族の伝承においても，自ら海人族の後裔とする瀬戸内海沿岸の人々は蛇を家系の象徴としている[35]。香川県の三豊郡では，蛇神をトンボガミという。土製の瓶に入れ，人目につかない台所の近くの床下などに置く。時々食物をやり，酒を注ぐ。屋敷に放し飼いの家もあるという[36]。徳島県の三好郡の事例によると，蛇神をトンベガミという。蛇を小さい瓶等にいれ，米の飯で飼う。村の祭りには甘酒を与える。蛇神持ちの家の人に恨まれると，トンベガミを憑けられるという[37]。広島県備北地方の事例ではトウビョウという蛇を小さい瓶に入れて，土の中に埋め，上に祠堂を建て，内々にまつる。酒が好物で，金持ちにしてもらうには蓋を開いて酒を注ぐという。この蛇神持ちの人は蛇の霊力を使役して，他人を呪う力をもっていると信じられている[38]。そして，日本では蛇飼育とは関係のない自然のままの蛇を家の守り神として蛇を大切にする風習もある。これは済州島の蛇神信仰と同じような現象である。蛇を祭ると金持ちになるという信仰のようである。屋敷に棲む蛇を家の守護神として見なす風習は日本各地に広く認められる。新潟県の南蒲原郡本成寺村（三条市）の事例によると，屋敷にヘンビニウ（蛇藁積み）があって，ここにある蛇をよく祀ると蛇のお蔭で金持ちになって，家が繁栄したと言われている[39]。日本の古文献『記』『紀』『風土記』には三輪山伝承，イザナミ伝承など様々な蛇神信仰に関わる記述が残されている。現在も，その蛇神伝承に出現する蛇は大神神社の祭神の化神といわれ畏敬されている。奈良県桜井市に本殿もなく，山そのものが御神体である大神神社のある三輪山がある。三輪山の山頂には奥津磐座といわれる磐座があり，蛇身であった大物主神を祭神としている。新潟県関川村では竹と藁で作った大蛇を300人がかりで担いで村内を回る。大水害犠牲者供養と，村を水没させようとした大蛇退治の伝説を結びつけた村民全員参加の祭りが行なわれる[40]。出雲の佐太神社では，毎年十月に季節風によって寄り来る海蛇を迎えて龍蛇神として祀っている[41]。また，根の国を支配する出雲神社と，出雲神社と深いかかわりのある諏訪神社には巨大なしめ縄がかけてあるが，御神体が祖先神イザナノミ命とかかわっている黄泉の国の支配者大蛇体であることが古くから言い伝えられている[42]。古代以来，日本人にとって蛇は死の世界と深くかかわってきたのである。人々の暮らしの中で現在でも祖先の霊をお迎えするお盆に死者の霊魂を運ぶ盆網をかついで村内をまわったり，「ほおずき」をお墓を供えるところが多い。葬送において，龍化した蛇体のシンボルを葬礼の先頭にかかげる習俗は現行の例として見られるが，蛇霊は龍化すると，死者霊を地下に案内する能力をもつことになるのである[43]。蛇があの世と深く結びついているイザナミ伝承と同じような神話を済州島でも探すことができる。済州島の叙事巫歌である産神神話，即ちサムスンハルマンポンプリである。この産神はもと，済州島の蛇神信仰の代表的な神は本卿堂神「七日婆（イルエハルマン）」と同じような東海龍王国の娘である。この本卿堂神「七日婆（（イルエハルマン）」神は蛇神でありながら龍神，海神，農耕神，産育神，治病神である。今日，済州島で，巫者（シンバン）たちが巫儀をする時に，神を呼ぼうとすれば，木線を敷いて置き，これを橋として招じ入れる。この橋は死の世界，あの世，生の世界，この世と深いかかわりを持つ存在である。

3）台湾と沖縄の蛇神信仰

台湾では，南部山地のパイワン族をはじめとする高砂族の間に「白歩蛇」信仰がある。パイワン族の住民たちは済州島の蛇神信仰のよ

うに蛇を霊蛇とみなして，たまたま遭遇することがあっても避けて殺さないとされている。この「白歩蛇」は猛毒を持つ蛇であるがパイワン族住民は決して敵としないばかりか，服飾や屋敷にも，祭祀呪具を容れる容器にも，祖先神像の頭部にも「白歩蛇」を彫刻する。パイワン族住民は再生不死の蛇を敵ではなく共存を必要とする特別な動物だとみなしている[44]。台湾にも済州島の基層文化を考えるうえできわめて重要な意味を持つ蛇トーテム宗教的習俗が見られる。パイワン族の間にはこの「白歩蛇」を頭目家（貴族）の祖先であり，太陽の子であったという創世神話が伝承されている。「昔，太陽が地に降り，卵を生んだが，蛇が食べてしまった。太陽は再び卵を生んだので木針にいれ，鞦韆にのせて動かすと女児が生まれた。女は蛇と婚して一男二女を生み，その男子は頭目の祖となった。」[45] 首長の家では子部屋を特設してそこに住まわせ，蛇を祖先神として祭祀を行なっている。これは中国華南越系民族の蛇祭祀の民俗と同じである。越民族の家蛇は家霊神，財神，祖先の化身である。台湾の高砂族は中国華南白越の後裔であると知られている。また高砂族に見られる越系民族の習俗として「蛇郎君伝説」がある。中国の華南地域広東，広西，貴州，福健の諸省と共通している[46]。台湾では済州島の「土中からの始祖」である三姓神話のようにブヌン族，アタヤル族にあり，また人類の岩ないしは石からの出現という形式の神話であればアタヤル族，および東海岸諸族にみられる。台湾の先住民である高砂族は非稲作的な，粟を中心に栽培する焼畑農耕民である[47]。済州島の基層文化も粟作中心の雑穀栽培文化である[48]。蛇神信仰がただちに稲作と結びつくと考える必要はないように思われる。W.エーバァハルトは「越文化」の基層として焼畑耕作民文化である「ヤオ」文化と河谷稲作民文化である「タイ」文化の相互浸透によって形成された複層の文化を考えている[49]。東シナ海をめぐる「土中から神話」がある地域は「越文化」のなかに「ヤオ文化」の要素流入の可能性も充分に考えられる。済州島の蛇神信仰は焼畑農耕民的な色彩を依然として濃厚に維持していたと思われる。済州島の土壌は火山灰土で，石がたくさんあり，風がつよく吹いて作物生育に苛酷な自然環境を持っている。粟作においても粟を畑に播くと発芽と生育のため風に飛ばされないように牛馬を追い回して畑を運動場のように踏み固める。そして，雨が降らないと粟の生育は不可能であるし，成長しても収穫は少ない。済州人にとって粟の不作は生死に関わる重大事であった。済州島人達は蛇の強靱さと不死性をどんな苛酷な自然環境のもとでも作物が生育，確実にみのりの時をむかえてほしいという願望に結び付けたと思う。済州人たちは畑の収穫物だけでは人口維持が難しかったので海を開拓しながら生存してきた。海中には海に関するすべてを管掌する龍王が住むと信じ，海村の村落祭であるヨンドン祭時に龍王の祭祀を行った。このヨンドン神は海上他界観と結びつくマレビトである蛇神である[50]。済州島の文化と親縁性を持つ沖縄においても仮面仮装のマレビト祭祀である龍宮信仰がある[51]。済州島のヨンドン祭時には漁民たちが参加して，航海の安全と豊饒を祈願する。沖縄の諸島にも龍宮は豊饒をもたらす神の住むところとして認識され，済州島のように豊漁や航海の安全のために祈る。沖縄における蛇トーテム観念，あるいは蛇神信仰も，海上他界観と結びつくものであったと考えられる。沖縄列島のマレビト祭祀は洞穴からの出現というモチーフが結びついて存在している。石垣島・白保には次のような宇宙開闢神話がある。「アマン神が，日の神の命で，天の七色の橋からとった土石を大海に投げ入れ，槍矛でかきまぜて島を作り，さらに人種を下すと最初にやどかりが生まれ出た地中の穴から，男女が生まれた。神は，二人を池の傍に立たせ，別方向に池をめぐるよ

うに命じた。再び出会った二人は抱き合い，その後，八重山の子孫が栄えた。」[52] この洞穴（＝地下他界）と始祖というふたつの要素は「土中からの始祖」神話のなかで結びつくものなのである。「土中より男女二人の誕生・出現－性的結合－繁栄というモチーフ」は済州島の三姓始祖神話にも見える。「土中からの始祖」は蛇である。沖縄　久高島のマレビト祭祀は龍宮という海上他界と結びついて「土中からの始祖」神話が伝承されている。カベール（龍宮神を祀る聖なる森：済州島の本卿堂と同じところ）の道の西側にアーマン権現という洞窟があり，この洞窟でアカマター（蛇）を二匹とったところ，それは兄弟と姉妹であったというものである[53]。済州島では蛇と龍を同一視した思想がある[54]。沖縄のマレビトは始祖としての蛇である。沖縄の人々はマレビトが存在する他界を蛇＝龍という考えに引かれて，龍宮とみなすようになったと考えられる。八重山諸島のマレビト祭祀では，水による若返りというモチーフがきわめて重要な意味をもっている。マレビトが若返るためには呪術的な水＝「ステミズ」が必要とされる。水の呪的な力によって蛇が脱皮するように復活し，人々に水（豊饒の水，再生の水）をもたらすとされる[55]。マレビトが水をもたらす存在であれば，水神である。水神は豊饒をもたらす蛇神である。新城島にはアカマタという祭祀を行う時蛇の脱皮する動作を何度も繰り返すという。八重山諸島の竹富島には青蛇（オウジハブ）を水神あるいは自分の祖先とする蛇トーテム的観念が見られる。蛇を祖先とみなす考えは台湾の高砂族の間にも存在している。済州島の海上他界から訪れるマレビト，ヨンドン，ハルマンの「ハルマン」は老婆とともに蛇を意味する言葉である[56]。家の外で仕える蛇神の祭壇である「チルソンヌル」を後，ハルマンとよんだ。宮古島には「三輪山型神婚説話：人間の女と蛇の婚姻」が伝承されているが済州島にも同じ伝承が伝わっている。

Ⅶ. 結び

以上韓国の済州島に見られる蛇神を取上げ，環東シナ海文化領域の中に位置づけて検討するように努めてきた。環東シナ海地域は古代越系文化の精神世界に刻印されていた蛇霊＝水神信仰が広く展開した地域であった。済州島の蛇神も古代越系文化の系譜を引くと考えられる。済州島の蛇神信仰には家庭的な富の神として豊饒をもたらしてくれる龍と蛇を同一視する龍蛇信仰の観念が見られる。済州島の蛇神信仰は個人（一族の守護神），家庭，村共同体三分で，祖先崇拝と結びついて巫俗儀礼として伝承されている。各地域には蛇を祀る習俗は色濃く残っているが，済州島と同じように蛇神は幸福，健康，富（豊饒）をもたらす家霊神，守護神である。済州島の「土中からの始祖」神話である「三姓神話」の思想的淵源は蛇神崇拝である。済州島にも「蛇トーテム的観念」が存在している。済州島における蛇トーテム観念，あるいは蛇神信仰も，海上他界観と結びつくものであったと考えられる。済州島の基層文化を考える上で重要な意味を持つ。この観念は中国，日本，台湾，沖縄環東シナ海地域で共通的に存在している。環東シナ海地域で活発な文化交流が行なわれていたように思われる。W．エーバァハルトは「越文化」の流出ルートとして，江南から済州島へ至る海上のルートも想定している。

引用文献

1）W．エーバァハルトは『古代中国の地方文化』（1987年刊，六興出版，白鳥芳郎監訳）の中で「越文化」を論じている。越文化は渓谷稲作民である「タイ文化」と山地焼畑耕作民である「ヤオ文化」が，中国東南部地域に進出した際に，相互浸透の結果生み出されたものとされる。

2）萩原秀三郎，『稲と鳥と太陽の道』，1996，大修館書店，147ページ

3）佐々木高明,『日本文化の基層を探る－ナラ林文化と照葉樹林文化－』, 1993, 日本放送出版協会, 169～170ページ
4）萩原秀三郎,『図説　日本人の原郷－揚子江流域の小数民族文化を訪ねて－』, 1990, 122ページ
5）玄容駿,「躍馬戯考」で, 済州の躍馬戯を東南亜の海洋文化を背景した競漕民俗の韓国的形態として把握された。『延岩玄平考博士回甲記念論叢』, 1980, 螢雪出版社, 韓国語版, 679～698ページ
6）国分直一,『東アジア地中海の道』, 1995, 慶友社, 35ページ
7）前掲書2, 50～51ページ
8）鳥越憲三郎,『古代朝鮮と倭族－神話解読と現地調査－』, 1992, 129～130ページ
9）筑波大学の佐野賢治先生は「民俗学再生の道」というシンポジウムで日本の民俗文化の特質を漢民族の民俗文化との比較を中心としたアジア的視点から考える「民族民俗周圏論」を提唱された。「比較民俗研究の一視角－固有信仰論から民族宗教論へ－」, 1998,『日中文化研究』12
10）済州島では古来蛇神信仰が盛んであった。朝鮮初期の地理志『東国輿地勝覧』巻三十八済州牧, 風俗条に「…又於春秋　男女羣聚廣壤堂遮歸堂　具酒肉祭神。又地多蛇遇蜈蚣　若見灰色虵　則似為遮歸之神　禁不殺…」
11）玄容駿,『済州島の神話』, 1996, SEOMO-OONMOONGO, 韓国版, 199～209ページ筆者翻訳
12）吉野裕子,『日本人の死生観－蛇転生する祖先神－』, 1995, 人文書院, 2～4ページ
13）前掲書, 87～141ページ筆者翻訳
14）前掲書11と同じ
15）依田千百子先生は八日神の神は, 日本のつきもの現象でよく似ているが, 済州島の場合, 娘ツキであること, 祟るということがその特徴であって, 日本のように, 動物霊が憑くという現象や観念は見られないと指摘された。『アジアの龍蛇』－造形と表徴－, 1992, 雄山閣「朝鮮の龍と蛇の信仰」71ページ
16）張寿根,『韓国の民間信仰－済州島の巫俗と巫歌－論考篇』, 昭和49年, 三秀舎206～207ページ
17）前掲書16
18）玄容駿, 玄承恒,「済州島蛇神話と信仰研究」, 22ページ,『耽羅文化研究』15, 1995, 済州大学校耽羅文化研究所
19）文武秉,「済州島蛇神信仰－蛇神儀礼を中心にして－」, 427～428ページ『玄容駿博士華甲記念輪叢』, 1992, 図書出版済州文化
20）松前健,「古代漢族の龍蛇崇拝と王権」,『朝鮮学報』57
21）三品彰英,「ヨンドン神小考」, 314～316ページ,『朝鮮学報』10, 昭和31年
22）秋葉隆,「済州島における蛇鬼の信仰－帰文化圏の試み－」,『青丘学叢』7, 昭和7
23）鈴木満男,「王爺とヨンドンと－マレビトの比較民俗学の試み－」,『文学』2, 1989, 岩波書店
24）前掲書8, 19ページ
25）古代国家は王を中心にして中央集権的統治体制が樹立する時期である。王権確立と社会通合に思想と理念が必要である。張志勲は古代国家の統治理念としてシャーマニズムというイデオロギーを取り扱う。「古代国家の統治理念に関する一考察, －シャーマニズムを中心にして－」, 1997,『韓国史研究』98
26）姜　彬, 新島翠訳,「長江下流域における蛇トーテム崇拝遺習－江南の文化と日本－」,『日中文化研究』2, 1991, 勉誠社
27）前掲書26, 67ページ
28）前掲書26, 68ページ
29）前掲書26, 68ページ

30) 前掲書26, 68ページ
31) 前掲書26, 69ページ
32) 金関丈夫,『発掘から推理する』, 1975, 朝日新聞社
33) 吉野裕子,『蛇－日本の蛇信仰－』, 1979, 法政大学出版局, 133～164ページ
34) 前掲書26, 33, 169～170ページ
35) たとえば, 伊予の河野家, 越智家, 厳島の平家, 豊後の諸方家などである。前掲書32, 140～142ページ
36) 小島櫻禮,『蛇の宇宙誌－蛇をめぐる民俗自然誌－』, 1991, 東京美術, 84ページ
37) 前掲書36, 110ページ
38) 前掲書36, 104ページ
39) 前掲書36, 101ページ
40) 東京新聞1998年8月27日15面参照
41) 萩原秀三郎先生は龍蛇を射日神話と結びつけて説明している。前掲書15,「太陽信仰と龍」, 79～80
42) 阿部真司,『蛇神伝承論序説』, 1981, 伝統と現代社, 69～100ページ
43) 国分直一,『日本文化の古層－列島の地理的位相と民族文化』, 第一書房, 141ページ
44) 国分直一,『日本民族文化の研究』, 考古民俗叢書7, 慶友社, 昭和45年, 323ページ
45) 前掲書33, 139ページ
46) 鈴木満男,「蛇王廟小考」, 232ページ,『季刊人類学』, 20－1, 1989, 京都大学人類学研究会
47) 前掲書3, 46ページ
48) 前掲書3, 171ページ
49) 前掲書1と同じ
50) 前掲書23
51) 吉成直樹,『マレビトの文化史－琉球列島文化多元構成論』, 1995, 第一書房, 78ページ
52) 前掲書51, 88ページ
53) 前掲書51, 90ページ
54) 前掲書18
55) 前掲書51, 100ページ
56) 前掲書46, 236ページ

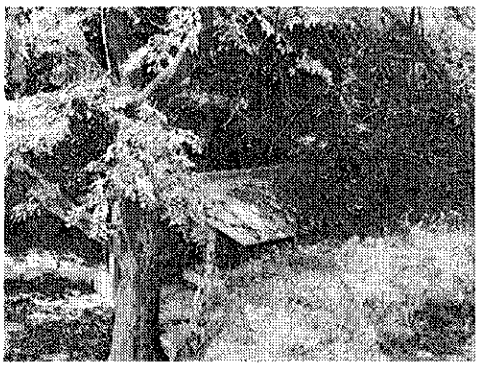

写真1. 蛇神に仕えている済州島W村の本卿堂外部

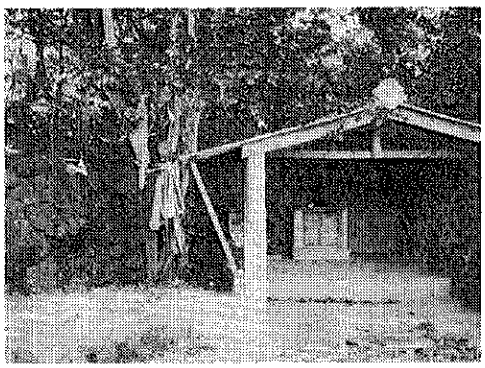

写真2. W村の本卿堂内部
木の中にかかっている五色の布は人間が神に奉げる最高禮物の表示である。

写真 3. 蛇神の祭壇と呼ばれる「チルソンヌル」
済州島南済州郡 S 村 K 氏家

写真 4. 済州島北済州郡 K 村 K 氏家の「チルソンヌル」

新刊紹介

鍾敬文著
『建立中国民俗学派（中国民俗学派を構築）』

著者が98歳誕生日の日（2000年3月25日）にこの本の出版座談会を開いたことは，著者が近年一貫して強調して来た中国民俗学の理論建設・体系形成に対する強い関心を示したものと言える。

1991年に「民間文化」，1996年に「民俗文化学」に継ぎ，この本で提出した中国民俗学が「多民族的一国民俗学」であるべきという主張は，中国民俗学が学問として持つべき特徴及びこの学問の在り方について，著者の見方の集大成的なものであると言えよう。

本の構成は，二つの部分からなっている。第一部分は正文編，第二部分は附録編（近年の発表文章，講演，手紙など）である。目次は以下の通り：

正文編　第一節　学派建立の必要性
　　第二節　学派建立の可能性
　　第三節　多民族的一国民俗学
　　—中国民俗学の独特性格
　　第四節　中国民俗学学派の趣旨と目的
　　第五節　中国民俗学構造体系の構想
　　第六節　今後早急に行うべきこと

附録編
『外来の民俗学理論に対する態度について』
『民間故事研究について若干の認識と意見』
『山西国際会議への手紙』
『「中国の祭儀，音楽と戯劇及び社会環境学術討論会」への祝賀の手紙』
『私と中国民俗学』
『文学研究中の芸術鑑賞と民俗学方法』
『巴赫金の文学狂歓化思想を略談する』
『鍾敬文学術重要論著リスト』

「多民族的一国民俗学」は，柳田国男の「一国民俗学」を意識して提出したように感じられるものであり，「中国民俗学は外国の民俗学の出張所でない」，「中国民俗学者は主要な精力を自分の民族の学科建設に置くべきであり，これが学術の正道である」など，鍾氏の中国民俗学に対する最新の考え及び海外の民俗学理論や研究方法などに対する姿勢が窺える一冊である。

（何　彬）

B 6 判 170 頁，1999 年 12 月刊，
黒龍江省教育出版社（中国語）8 元